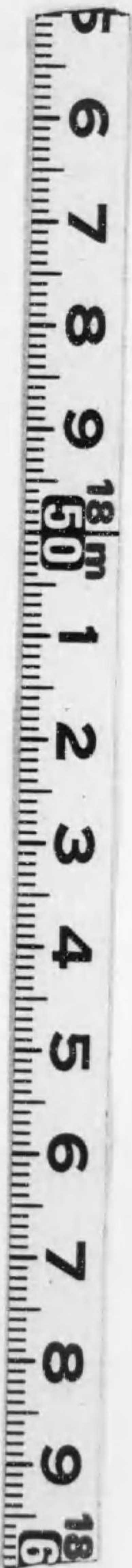


516

43



始



H 131

菊
下
地

6575

武鬼神

ハナハシ海東書

和歌抄例言

歌の、靈しく妙なるものなり、高城王の、采女の歌は依りて、國司の罪を宥め、北野の大神の、小大進の歌は依りて、其の濡衣を脱がしめ給ひき、まゝに、紫式部の、歌は依りて、其の節操を全くする事を得、和泉式部の、歌は依りて、赤繩の絶えんとせるを繋ぎより、風吹けば沖津白波の歌の、覆水を復へさしめ、我れもえり泣きてその歌の、後妻を逐としめより、大隅の郡司の歌の、國司の笞を抛らしめ、安倍貞任の歌の、八幡太郎の鏃を止めより、まさ、阿倍仲麿の歌の、唐土の人を泣らしめ、能因法師の歌の、三島明神の神威を得より、

されば、神代の昔より、人の世の今に至るまで、貴きも、賤しきも、斯の道ミチよ
おりふつひ、斯の道ミチの、御國ミクニの手ぶりの産ウツなる道ミチよて、賢サカしむちさる外國トククニぶり
との、様ヤウかとりて、赤アカき淨キヨき直ナホき正タビしき、誠マコトの心ココロも、是コトよ因アヲりて見ミられ、人の
心の善ヨシき悪アクしき、人の情ナサケの深フカき淺アサきも、是コトよ因アヲりて知チられるれば、古今集の序
よも、いにしへの代ヨ々の帝ミカドの、花ハナのあしと、月のゆふべよ、侍臣ウヂノミよ、和歌ワカを奉
らしめて、其の歌ウタよ依ヨりて、其の人の賢サカ愚オロシをも知チろしめしきといへり、されば、
平兼盛ヘラノトモノリの、志願シケンの申文ウケモノよさへ、和歌ワカを書カきて、澤水サハミツよ老オいゆく影カゲを見る田鶴タヅの
鳴ナく音ネ雲居クモヰよ聞キえざらめやと聞キえされど、咎トガめも爲セさせ給タマはざりき、
歌ウタの、誠マコトを詠ヨむものなり、誠マコトを詠ヨむとの、物事モノコトよつきて、有アりの儘マカを詠ヨむをい

ふ、もと、歌ウタの、詠嘆ナゲキの聲コエとて、嬉ウレシしき事コト、悲カナシしき事コトよつきて、まことの、花鳥
の色音イロネよつきて、其の時の心の感カンを詠ヨむものなれば、感カンずる事コトの無ナき時トキの、詠
までもあるべきなれど、初學ウヒマナヒの人の、歌ウタを詠ヨみ習ナんとするよの、然サの言コトふべ
きよもあらねば、題イを設セけて、月の題イなれば、月ツキよ對オへる時トキの心ココロをへよなりて、
例レイへば、夏の月ツキなれば、影カゲの涼スズしきを詠ヨみ、秋アキの月ツキなれば、光ヒカリのさやりなるを
詠ヨむたぐひなり、まよ、旅タビの題イなれば、旅タビよある時トキの心ココロをへよなりて、例レイへば、
旅タビ寢ネの淋シしきを詠ヨみ、家イの人の待マち居イる心ココロなどを思オモひやりて詠ヨむたぐひなり、
然サるよ、此コノの歌ウタを詠ヨむよの、昔ムカシより、種タネ々の論ロんもありて、兎ウやせん角カクやせん
言コトひいで、竟ツキよの、歌ウタを詠ヨむ時トキの容態スガタをさへよいへる事コトありて、道綱ミチツナの母ハハの、

暗き所は居て詠み、和泉式部の、引被きて詠みて、晴の時も、顔を、懐よ引入
れて詠みよるといひ、西行法師の、縁行道をして、嘯きあるきて詠みしなども
いへり、然るよ、初學の人よ、歌を教ふといふ學匠よちの作法を見れば、多く
の、題を與へて、其の歌を詠ましめて、語よ、俗語の卑しきがあれば、雅言の
正しきよ改め、言づりひ、假字づりひ、互爾乎波などよ違へるがあれば、改め
直す事なるが、夫れも、然る事なれど、此くての、初學の人、其の直されよ
る歌のみこそあれ、まよ詠まんとしても、同じさまなれば、いつまでも、獨立
しての詠み得がよくて、學匠をのみ持みとする癖も附く事なれば、學匠よ、直
しを乞ふも、然る事なれど、何とりして、獨立して詠み得る道を求めざる可ら

ず、古人の、歌を詠みよるさまを見れば、今の世の人の如く、苦しげよて詠み
よるとの見えず、語なども、俗語よまれ、方言よまれ、思ふ事を、思ふまよよ
いひいで、人よ、直しを乞ふなどの事もなくて、其の詠みいでよる歌の、今
よ至るまでも、人口は膾炙せるもあるの、歌を詠まんとする人の、よく、心を
とどめて思ふべき事なり、されば、余の、常よ、此の事を思ひて、奈何せをや
と案ひよして、ふと案ひ出でし、古人の、歌の學問などいふ事もせず、まよ、
他人よ、直しをも乞て、名歌を詠みよるの、其の人、常よ、古歌の名吟を口
ずさびて、心も、詞も、能く悟り得るをもて、己の詠むよも、其の心、其の
詞をもて詠みしよらよ、不知不識の間よ、名歌も出來るやうよなりよるなり、

然るよ、今の、古人の名吟を口ならすといふ事もせねば、歌の手本とても無く、
唯だ、歌數多く詠まん程よの、後よの、さりとともやうと思ひとりてあるが如
くなるの、歎りもしき事なれば、せめての、手本となるべき、古人の名歌をど
よ集めて見せむやとて、年頃思ひこりて、來通ふ少年などよの、十首二十首
づゝ見せてありしよ、此の頃、ふと、本居先生の著書中よ、先生の、初學の人の、
歌の詠みやうを教へるがあるを見れば、今、此よいへるが如くなりしりば、
余の、愈々、手本の事を思ひこちて、此の和歌抄を物しるなり、本居先生の
いそれよるよの、或儒者の説よ、初學の者の、詩を作る仕方を教へる詞の中
よ、作りならひよの、古人の詩を、遠慮なく剽竊して作り覚え、猶具足し難く

バ、唐詩礎、明詩礎、詩語碎錦などやうの物よて、補綴して拵ふるがよきなりと
いへるの、實よよき教へさまなり、歌よむもかそらざる事よて、初發より、己
が思ふさまを、あらよ詠み出でんとすれば、歌のやうよもあらぬ僻事のみ出
來て、後までも、さる癖の除り難きものなれば、初學の程の、詞のつゞきも、
心のおもむきも、唯だ、古りよる跡よ依りて詠み習ふべき事なりといそれより、
されば、余の、今、此の篇を思ひこちしも、全く、先生の説よ従ひてなり、
一此の抄よ引出でる歌の、萬葉集、古今集をこじめて、其の他、種々の物よ
り抄しよるなるが、此の、唯だ、余が譜記せるもののみなれば、猶、此の外
よも、數多あるべけれど、余の心よての、かむりよても、詠みうりべて、

古人の心をへ、詞つゞきをも知れらば、必ず、歌の出来イックべしと思はるゝまゝ、
よ、あながちよ、多くあさり集めんとも爲セざるなり、然サれば、此の引出ヒキイで
る歌よの、聊トキゴトりづゝの解言トキゴトを添へ、まゝ、末よの、余が歌をも添へより、其
の歌の、本歌を題として詠ヨみさるもあり、返歌カヘシのやうよして詠ヨみさるも、心
をかへて詠ヨみさるも、其の人の心をへを詠ヨみさるなどもあるの、初學の人の
爲よ、いりやうよも詠ヨむべきを知らせんとのすさびなれば、取りも取らずも、
見ん人の、心まりせよ爲セらるべし、

二此の抄ヒキイよ引出ヒキイでさる歌の作者の知られざるの、固より、讀人ヨミビトを知らずとして出デ
せるが、此の讀人ヨミビトを知らずといふよ、人口クワイシヤよ膾炙クワイシヤせる歌の多きの、秀歌なるが

爲よ、古來、口クチより口クチよと傳へ來て、其の歌の誦すれども、作者を問ふ要も
無ければ、終よ、作者の名を失ひさるなり、されど、猶、其の歌を載せさる
書名の知られさるの、時代をも、大概の推知せらるれど、稀ヒよの、讀人ヨミビトを
すよて、其の歌の出でさる書の知られざるもあり、彼の亡ナくてぞ人ヒトその歌の
如きの、源氏物語よも引りれされど、定家卿も、其の出所ユを得知ユらざりき、
一此の抄ヒキイよ引出ヒキイでさる歌の作者も、多くの、諸記のまゝよて、思ひいづるよま
りせて書きさるなれば、書りぬがあるの、諸記もせず、思ひも出でねば、さ
て措きさるなり、さるの、此の抄の、古歌のよきを知らせんまでのすさびよ
て、考證などよの、要も無ければなり、

一此の抄の解言トキゴトよ、縁語エンゴ、仕立シカタテなどのへるの、本居先生の歌の解言よ倣ひていへる迄よて、殊なる事よのあらねど、歌ウタの、詠嘆ナゲキの聲なれば、詠嘆ナゲキの聲を麗しく聞かせんよの、縁語エンゴといひ、枕詞マクラコトバといひ、序ジヨといふ類の詞づりひの大切なるの固よりよて、仕立シカタテといふ事も、三十一字の上よての、麗しく聞かしむれば、心すべきなり、仕立シカタテの、河といへば、水ミヅ、氷コホる、澄スむ、濁ニゴるなどいふ語を用ひ、火といへば、燃モゆ、滅キゆ、焦コガる、煙ケツるなどいふ語を用ひて、いづくまでも、水火といふ語を助けて、孤立せぬやうよ言ひまをすをいふなり、
二此の抄の、通篇、みな、高見の講義を、妹の幸子サチコの筆記せしものなり、さるの、高見の、別ベツよ、女流和歌抄の附録を物せんとして、其の方の歌どもを選ぶ

よ暇なりりしりべなり、

大正十一年八月をりり、豊前國宇佐郡驛館村の

中間の家よてゑるす

埋書居士

和歌抄

高麗名人

百濟國博士王仁

大津皇子

厚見王

安貴王

柿本人麻呂

山邊赤人

中興の事ありて...
大正十一年八月...
...

大伴宿禰像見

三方沙彌

山上憶良

若麻績部諸人

山口忌寸

船王

高市連黑人

土師宿禰道良

內相藤原朝臣

大伴家持

惟喬親王

在原業平朝臣

良岑宗貞

僧正遍昭

河原左大臣

藤原興風

藤原兼輔

藤原守文

藤原敦忠朝臣

坂上是則

源順朝臣

紀貫之

壬生忠岑

紀友則

中納言朝忠

大江千里

素性法師

凡河内躬恒

大中臣能宣

清原深養父

源等朝臣

左京大夫道雅

鎌倉右大臣

大隅の郡司

葦刈男

和歌抄

春の歌

子等コラ名ナよかけのよろしき朝妻アサツメの

片山カタヤマぎしまかすみたなびく

文學博士 物集 高見 著

讀人志らず

此の歌は、萬葉集に見えざる讀人しらすの歌なり、歌の意は、近江の朝妻とい

ふ地の片山岸よ、霞が棚引きて見ゆるよ、好き景色よての無きり、夫れよ、朝妻といふ名の、若き女の名よかけていひても、面白き名よてあるよ、其處よ、霞の棚引きて見ゆるの、何といひやうもなき、好き景色よてあるよとの意なり、されば、兄の、霞を、床夏の花よかへて詠みりへより、床夏よりへし、朝妻なれば、寢床の床よも、縁のあるべきを思ひてなり、

妹が名よ呼ぶまく欲しき朝妻の

岸なつりしき床夏のもな

紀貫之

野邊見れむ若菜つみけりうべしこそ

垣根の草も春めよけれ

此の歌の、拾遺集よ見えざる歌よて、其の意の、今日、野邊を見れば、人の、若菜を摘みて居るが、尤なる事なり、自身の家の垣根の草も、何となく春めきて來よとの心なり、されば、兄の、うちまりせざる若菜の歌を詠みそへより、

若菜つむ人のみつごふ春日野の

春も今こそさきりなりけれ

若菜つむのみをふしよて芹河の

竹田の原よ今日も来よけり

まよ

紀貫之

吾が背子^{ココロ}が衣^{ココロ}もるさめ降るごとよ

野邊^{ノノ}のみどりぞ色^{いろ}まさりける

此の歌の、古今集に見えたる歌よて、其の意の、此のしめやらなる春雨の降る
度毎よ、次第よ、野邊の草の緑の色^{ミドリ}の増りて来るよとの心なり、吾が背子^{ココロ}が衣^{ココロ}
の、春といふ語よかけたる枕詞よて、衣の、洗ひもし、張りもする物なればな
り、兄のも同じ心なり、

日ごろ経て降る春雨よ見とさしの

野邊^{ノノ}の緑^{ミドリ}の色^{いろ}ぞそひける

此の本歌の作者、紀貫之の、醍醐天皇の御代の頃の人よて、最も、和歌よ、妙
を得たる人なり、古今集も、此の人の撰よて、女も、亦よ、歌を善くせりと覺

しくて、古今六帖の撰あり、まゝ、貫之の、土佐守の任満ちて、京に歸られし時の日記の、世に聞ゆる土佐日記よて、假字文の日記の、此の日記をはじめとせり、

壬生忠岑

子の日する野邊よ小松のなりりせむ

千代のためしよ何を引りまし

此の歌の、拾遺集に見えたる歌よて、其の意の、正月の初の子の日よの、小松

を引きて祝ふ事なるよ、引きよ行く野邊よ、若し、小松の無りりしならば、其の祝ふ千代のためしよの、何を引りん、小松のあればこそ引く事も出来るよとの心なり、されば、兄の、唯、子の日の歌を詠みより、

君が代のごきそなるべきためしよそ

子の日の松をうべも引くなり

此の本歌の作者、壬生忠岑の、醍醐天皇の御代の頃の人よて、和歌を善くすと
の聞もありて、古今集撰者の一人なり、されば、官の、むづりよ、攝津の大目
よて、六位の人なりしなり、

八
讀人志らず

梓弓^{アツサユミ}おして春雨^{ハルサメ}今日^{アツ}降りぬ

明日^{アス}さへ降^フらむ若菜^{ワカナ}つみてん

此の歌の、古今集に見えざる歌にて、其の意の、春雨も、今日降りされば、若菜も生ひ出づる事ならん、若し、明日も降るならば、野邊に出で、若菜を摘まんとの心なり、梓弓の、押張る物なれば、春といふ語まかくる枕詞^{マクラコト}なり、兄のも、同じ心をへなり、

若菜^{ワカナ}つむ人^{ヒト}こそ見ゆれ春雨^{ハルサメ}の

なごりかこりぬ野づらなれども

讀人志らず

梅^{ウメ}が枝^エよ來^キ居^キるうぐひず春^{ハル}かけて

鳴^ナけどもいま雪^{ユキ}も降^フりつゝ

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の心の、去年の冬より、梅よ來て居る

鶯の、春をかけて鳴きて居れども、今日も、まど、雪の降りて居るよ、いつ
まで、今日の寒さの續く事よてあるりとの心なり、されば、兄の、唯ど、雪中
よ、鶯の鳴くを詠みより、

のざりなる春の鳥ごも見えぬ哉

雪降る野邊よ鳴けるうぐひす

讀人志らず

も、しきの大宮人をいとまあれや

梅をかざしてこゝよつどへり

此の歌の、萬葉集よ見えざる歌よて、其の意の、禁中よ宮仕する人々の、身の
暇もある事よや、誰もく、梅の枝をかざして、此處よ集りより、さてく、
風流なる事なるよとの心なり、百敷との、大宮よかけていふ枕詞よて、大宮と
の、禁中をいへり、されば、兄の、梅を、櫻よかへて、次の如く詠みより、

花ぐもり空のかすみぬ宮人の

さくら狩する時や來ぬらし

歌の意の、此の頃の、花曇ハナクモリして、空も霞みさるを見れば、大宮人の櫻狩サクラガリすといふ時も来さるらし、定めて、風流なる面白き遊アソビもあるならんとの心なり、花曇ハナクモリとの、櫻の咲りんとする頃の空の曇れるをいひ、櫻狩サクラガリとの、櫻花を尋ねて遊びあるくをいふ、

讀人志らず

梅ウメの花立寄ハナタチヨるむりりありしより

人ヒトのとがむる香カもぞまみける

此の歌の、古今集に見えさる歌にて、其の意の、梅ウメの、能く咲きて、人も立寄タチヨりて見るむりりニホは匂ニホひニホりてありし故は、自然は、人の袖ソデの香カは染シみさるなりと怪まるゝ迄イニシよしみイニシりさる事よとの心なり、古イニシの、女の、衣裳イニシは薰物カキモノして、其の香カを移す事ありて、其の薰物カキモノの、梅ウメが香カとて、梅花の香カは似さるもあれば、眞マコトの梅花の香カの、人の袖の香カりと、ふとして怪まるゝ事もありしなるべし、されば、兄の、其の香カを、鶯ウは咎められさる意にて、次の如く詠みさ

立寄タチヨりて香カもまごころめぬ梅ウメが枝エよ

何うぐひすと鳥の鳴くらん

此の歌、鶯のうよ、憂きをいふ、うを兼ねしめたるなり、まゝ、鶯といふ鳥も
其の鳥の聲よて名づけたる事なり、古今集の歌よも、心より花の雫よそばちつ
うぐひすとのみ鳥の鳴くらんと詠みたるが如し、

読人志らず

野邊ちりく家居しせれを鶯の

鳴くなる聲をあさなく聞く

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意なり、野邊の近き地よ、家居して佳
みされば、鶯の聲なり、毎朝毎朝聞く事なるが、長閑なる聲なるよとの心なり、
兄も、同じ意を詠みたり、

家居せる野邊よそ人の稀なれか

朝まどきよりうぐひすの鳴く

紀友則

君ならで誰より見せん梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、其許ならで、誰人より見すべ
きぞ、梅の花の、色も香もよけれど、其のよきを知るの、人よ依る事なれば、
誰人よも見せんとの思はずとの心なり、兄のも、同じ心なり、

色も香も知る人ぞ知る梅の花

たゞ見るこのみ思もざらなん

此の本歌の作者、紀友則の、醍醐天皇の御代の頃の人にて、和歌を善くせしを

もて、貫之など俱よ、古今集撰者の一人にてありき、

中納言朝忠

うぐひすの聲なりりせむ雪きえぬ

山里いりて春を知らまし

此の歌の、拾遺集に見えざる歌にて、其の意の、雪の消えぬ山里にての、若し
鶯の聲よても聞きぬならば、何として、春の來る事を知るべきぞ、鶯の鳴け
ばこそ、春よなりし事も知らる事よとの心なり、兄のも同じ心なり、

雪ユキさえぬ我ワヶ山ヤマざごのうぐひすの

聲コエよぞ春ハルを聞キきこりける

此の本歌の作者、中納言朝忠アサタケの、三條右大臣定方の二男よて、村上天皇の御代の頃の人なり、學者よて、和歌ワカも上手なるよ、笙シヤウを善く吹きこりといふ、

紀貫之

春ハルがすみたなびきよけり久方ヒサカタの

月ツキのかつらも花ハナや咲サキくらん

此の歌の、後撰集に見えざる歌よて、其の意の、春ハルよなれば、野ノよも、山ヤマよも花の咲くより思へば、月の中よの、桂カヅラといふ樹ありて、花も咲くとの事なれば、かく、霞カスミの、空ソラよ棚引タナヒくの、其の桂カヅラよも、花の咲きよるなるべしとの心なり、兄のと同じ心なり、

春霞ハルカスミにほふを見れむ久方ヒサカタの

月ツキのかつらの花ハナをこそ思オモへ

大江千里

照りもせず曇りももてぬ春の夜の

おぼろ月夜よ志くものぞなき

此の歌の、新古今集に見えたる歌にて、其の意は、春の夜の、のどりなる景色の、此の照りもせず曇りももてぬ朧月夜よしく物の無し、闇の夜といふまでも無く、月夜よても、空の晴れをさるるの、霞の無き爲にて、霞の無き、春の性とも見えねば、春の、朧月夜よ限れるよとの心なり、兄のも同じ心なり、

花ぐもり曇りももてぬ春の夜の

月のこゝろを見ん人もがな

此の本歌の作者、大江千里の、宇多天皇の御代の頃の人にて、参議音人の第二子なり、音人、博覧宏才なりしりらよ、千里も、亦さ、文學の聞えありて、殊よ、和歌よ長じよりといへり、

読人志らず

吹く風よあらそひかれて足引の

山のさくらをほこるびよけり

此の歌の、拾遺集は見えざる歌よて、其の意の、此の春の、長閑は吹く風よの、
香ともいぬれずして、山々の櫻も、蕾の綻びかけざるよとの心なり、兄のも同
じ心なり、唯ぞ、綻ぶを、咲むよかへざるまでなり、

のごりなる風よ吹りれて昨日今日

山のさくらも咲みそめよけり

咲むといふの、咲顔は見ゆるをいふ、笑ふとの、聲をいごしていふ事なれば、

咲むとの、其の心をへ同じりらず、

讀人去らず

浅みどり野邊の霞をつゝめども

こぼれて匂ふ花さくらかな

此の歌も、拾遺集は見えざる歌よて、其の意の、浅き緑色の野邊の上の霞の、
山をかけて、棚引きて、包みてのあれど、山は咲きざる櫻の花の、其の霞の間
よりこぼれいでる如くよて、匂ひであるよとの心なり、兄のも、同じ心なれ

ど、野邊といもずして、山姫として詠みし、山姫、山を守る神よて、春を掌るなどいへればなり、

山姫のかすみの袖のせむけれむ

うべなこばれて花の匂へる

素性法師

いざ今日も春の山邊ままじりなん

暮れなむ無げの花のかげりも

此の歌の、古今集に見えたる歌よて、其の意の、サア今日の、櫻狩して、春の山邊を狩り暮らす事よせん、假令、日夕暮れさればとて、花の陰の無しといふよても無ければ、何方の木の下よても宿られぬ事の無きよとの心なり、兄のも、同じ心なり、

櫻がり暮れなむ暮れね一夜ごよ

花のあるじごなりなましりむ

此の本歌の作者、素性法師の、良岑宗貞の子よして、清和天皇よ仕へ奉りしを、父の勧めよて出家せり、宇多天皇の寛平八年、雲林院行幸の時、權律師

となりさり、

読人志らず

櫻サクラがり雨アメを降り來キぬおなじくぞ

濡ヌるとも花ハナの陰カゲよかくれん

此の歌の、拾遺集に見えたる歌にて、其の意の、今日の、櫻狩サクラガリよ出でるよ、雨降アメりいでさり、奈何イカニせをよりらん、同じ濡ヌるゝならば、花の陰カゲよかくれて、花ハナの雫シヅクよ濡ヌれんとの心なり、兄イモのも、同じ心なり、

故コトさらよ濡ヌれても見らん春雨ハルナメの

ののごりよかゝる花ハナの志シづくよ

紀貫之

風カゼふけを方カタもささめず散チる花ハナを

いづ方カタへ行く春ハルとりを見ん

此の歌も、拾遺集に見えたる歌にて、其の意の、春ハルの、萬事ヨロツノコトよつきて、花ハナを

いふ事なれど、^{サクラ}櫻花も、風の吹く時の、風よつきて散り亂れて、^{二八}方角も定めず
飛び行く事なれば、春の暮れて行く方も定らねば、いづ方とも見えぬの、惜し
き事よとの心なり、兄のも、同じ心なり、

春の行く方^{ハル}もいづくぞ風^{カゼ}も散る

花^{ハナ}の行方^{ユクヘ}もえこそ見こりね

紀貫之

^{サクラ}櫻散る木^キの下^{シタ}風^{カゼ}もさむじらで

そらよ知られぬ雪^{ユキ}ぞ降りける

此の歌も、拾遺集に見えたる歌にて、其の意の、花^{ハナ}を吹^フき散^チらす櫻木^{サクラノキ}の下の風^{カゼ}
の寒くもなくて、天^{ソラ}よの知られぬ雪^{ユキ}の降り来る事よとの心なり、兄のも、同じ
心なり、

^{サクラ}櫻花散^チりのまがひは淡雪^{アワユキ}の

降^フるうご空^{ソラ}をあふぎてぞ見る

九河内躬恒

雪とのみ降るどにあるをさくら花

いりに散れとハ風の吹くらん

此の歌は、古今集に見えざる歌にて、其の意は、櫻花の、散り易き花とて、既
ま、雪の降る如くなりて、散りま散りてあるを、猶、いりま散れといふ心にて、
風の吹きま吹く事ならん、情のなき風のしとさよとの心なり、兄の、唯ぞ、櫻
花を評して詠みたり、

たむむまで咲くどにあるを櫻花

散るさへよこそめでさりりけれ

此の本歌の作者、九河内躬恒は、醍醐天皇の御代の頃の人にて、延喜年中、御
厨子所候じ、和泉大掾となり、七位を授けられさり、此の人、和歌の上手な
りしをもて、紀貫之と俱よ、古今集撰者の一人なりしなり、

紀貫之

露ならぬ心を花よおきそめて

風吹くことよ物おもひぞする

此の歌も、古今集よ見えざる歌よて、古今集よの、戀の部よ入れてあれど、花をいへれば、今の、春の歌とせり、其の意の、花よの、露こそおく事なれど、自身の、露よていなく、心を、花よおきそめてより、風の吹く度毎よ、散りもやするとの物おもひをする事よとの心なり、兄のの、すこし、其の心をかへより、

吹く毎よ花もや散るこ我が歎く

風を心よやごるなりけり

大中臣能宣

ちりくてぞ色をまさされる青柳の

糸をよりてぞ見るべりりける

此の歌の、拾遺集よ見えざる歌よて、其の意の、春の柳の、遠方より見るよりも、近くて見るこそ、緑の色も能く見ゆれば、柳の糸を見るよの、近く寄りて見るべき事ぞとの心なり、糸といへる故よ、縊るを兼ねて、寄る事をいへるなり、兄のもの、同じ心なり、

うちをへて靡く柳の糸をさへ

長き春日をよりつゝぞ見る

此の本歌の作者、オホナカトモヨシノブ大中臣能宣の、村上天皇の御代の頃の人にて、最も、和歌を善くせり、されば、サカヘノモチキ坂上望城、ミナモトノシタガフ源順、キノトキフミ紀時文、キヨハラノモトスグ清原元輔と、後撰集を撰し、ナシツボ梨壺の五人と稱し、ナシツボ此の五人を、

読人志らず

花見よそむれて行けども青柳の

いとのもとよそくる人も無し

此の歌も、拾遺集に見えざる歌にて、其の心の、春よなれば、花見よの、人の、大勢よて群れても行けど、柳の糸を見よとて、一人の來る人も無きよとの心なり、糸といへる故よ、來るよ、繰るを兼ねていへり、兄のも、同じ心なり、

青柳の糸し引けねむくる人も

うべ花よのみよりごよるらん

大伴家持

春の野よあさる雉子の妻戀よ

おのらありりを人よ知れつゝ

此の歌の、萬葉集に見えざる歌よて、其の意の、春の野よ、餌を覓むる雉子も、雌を呼ぶ聲よて、おのれの在所を、人よ知らるゝ事よ、人よ知らるれば、捕へらるゝ事なれど、それも忘れて、聲を發てゝ鳴くとい、不便なるものよ、男女の、互よ戀ひ慕ふの、人のみならず、鳥などの上よもあるよ、哀れなる事よと

の心なり、然るよ、兄の、まよ、焼野の雉子とて、雉子の、卵を生みおきよる野よ、火のつきて燃ゆる時の、其の邊を離れずして、鳴き悲むといふ事もあれバ、雉子の、春野よ鳴く事の、妻戀のみよても有るまじきを、人の、何とて、妻戀のみよいひなす事なるり、此の、人の上よの、妻戀の事の多き故よても有るべしとて、次の如き歌を詠みより、

春の野の焼野の雉子もあるものを

妻戀このみ人のいふらん

此の本歌の作者、大伴家持の、大納言旅人の子なり、聖武天皇の御代よ、越中

守となりより、家持の、和歌の上手なりしをもて、萬葉集も撰しふるなりといふ。

讀人志らず

今更イマサラよ雪降ユキフらめやもかぎろひの

もゆる春邊ハルノヘとなりにしものを

此の歌も、萬葉集よ見えざる歌よて、其の意の、春もたけて、此の頃の、かぎろひも發ちてあるものを、今更イマサラよ、雪ユキの降るなどいふ事のあるべきりの、決して

て有るまじきなり、これよりの、世の、長閑ノドカなるのみであるよとの心なり、かぎろひとの、春ハルの末ノヘ、野ノなどよ出で、見れば、淡アハき煙ケツリのやうなる物の、草クサなどの中より、發タつ事ありて、それをいふなり、かぎろひの、文字モジよの、陽ヒ儀ギと書きて、まよ、かぎろふとも、いとゆふともいふなり、かぎろひの本モトの義コトの、淡アハき煙ケツリのやうなる物の、ちらくとして、日影ヒカゲを、すこし遮サヘるやうもある故よ、いひいでる語なり、されば、兄の、かぎろひの發タつ頃の長閑ノドカけきを見んよの、雲雀ヒヨドリの鳴く野ノよ出で、見るべし、雲雀ヒヨドリの、春ハルの末ノヘよ、空ソラ高く鳴くものなれば、其の鳴く邊ヘよての、殊コトよ、春ハルの長閑ノドカけき事も知らるゝよとの心を詠みよ

かけろふのもゆる春日ののどけさを

雲雀鳴く野よ出で、こそ見れ

凡河内躬恒

三千年よなるてふ桃の今年より

花さく春よあひまけるかな

此の歌の、拾遺集よ見えたる歌よて、其の意の、唐土の西王母といふ神人のも
てる桃の、三千年よ、一度、實を結ぶといふよ、其の桃の花の、今年より咲き

るよ、愛でよき桃の咲く春よ逢ひよりと思へば、此の身さへ、たゞよてり
居られぬ心地もするよとの心なり、兄のも、同じ心なれど、少し、詞をかへよ
り、

三千年よなるてふ桃の花を見む

よもぎが島の心地こそせめ

厚見王

蛙鳴く神南備川よ影見えて

今や咲くらん山吹の花

此の歌の、萬葉集に見えたる歌よて、其の意の、山吹の花の、今頃の、蛙の鳴くといふ神南備川よ、花の、影をうつして咲けるならん、何とりして見よきものなるよとの心なり、兄のも、同じ心なり、

蛙鳴く神南備川よ影おちて

咲きこぼれさる山吹の花

此の本歌の作者、厚見王の、孝謙天皇の御代の頃の人なれど、其の傳記など

詳らりならず。

讀人志らず

今もかも咲きにほふらん橘の

小島が崎の山吹の花

此の歌の、古今集に見えたる歌よて、其の意の、橘の小島が崎の山吹も、今頃の、花咲き匂ふ事ならん、往きて見よきものなるよとの心なり、橘の小島が崎の山城の宇治川の邊よある地名なり、兄のも、同じ心なり、

橘タチバナの小島コジマが崎サキよごころ得エて

むろしより咲サく山吹ヤマブキの花ハナ

源順朝臣

春ハルふりみ井手イデの河波カハナミたちりへり

見てこそ行ユりめ山吹ヤマブキの花ハナ

此の歌の、拾遺集に見えたる歌よて、其の意の、井手イデの山吹ヤマブキの花の、一度の見

る事なれど、今の、春もたけされば、まよ、其の色イロも一入ヒトシホなるべければ、立タテ歸カへりて見て行きさきものなるよとの心なり、河波カハナミの、立歸オチカへりといふ語の枕詞マクラコトバよて冠カブらせたるなり、兄ケイのも、同じ心なり、

行く春ハルのかさみがてらよ來キてぞ見る

井手イデのこさりの山吹ヤマブキの花ハナ

此の本歌の作者、源順朝臣の、村上天皇の御代の頃の人よて、大中臣能宣等と、後撰集を撰しより、梨壺ナシツボの五人の一人なり、

夏の歌

讀人志らず

時わりず降れる雪りと見るまでよ

垣根もたわよ咲ける卵の花

此の歌の、後撰集よ見えたる歌よて、其の意の、雪の、冬降る物なれど、此の雪の、時をも嫌はず降るりとも見ゆる迄よ、卵の花の、真白よなりて、垣根も、たわよくするむり咲きてあるよとの心なり、兄のも、同じ心なれど、雪を、月白よかへていへり、

卵の花の咲きの盛りを月まろの

空りごさへよ見えとさりつゝ

讀人志らず

卵の花の咲ける垣根をみちのくの

まがきの島の波りとぞ見る

此の歌の、拾遺集よ見えたる歌よて、其の意の、卵の花の咲きたる垣根の、白

ふして、雪の如くも見ゆれば、遠くより望み見れば、陸奥よ、籬の島といふが
あるが、其の島の垣よ、白波の打寄せよるよての無きりと思ひて見て居る事よ
との心なり、兄の心、唯ぞ、卯の花を詠みしなり、

月と見え波と見ゆてふもしりいでの

垣の卯の花今さりりなり

丸河内躬恒

今さらよ何おひ出づらん竹の子の

うきふし志げき世とを知らずや

此の歌の、古今集に見えよる歌にて、其の意の、今見れば、竹の子が生えよる
が、何とて、今更よ生ひ出でよるり、此の世の中、憂き節のみ多き事なるを、
今生ひ出づるもの、然る事とも知らずてこそ、生ひ出でよらめど、感然なる
事なるよとの心なり、兄のも、同じ心なり、

憂きふしの志げきも知らで竹の子の

おふるさへこそあれなりけれ

九河内躬恒

ほととぎすをちりへり鳴け少女子が

うちふれ髪カミのさみどれの空ソラ

此の歌の、拾遺集に見えざる歌にて、其の意の、郭公ホトトギスの、まさ、戻り来て鳴き
てくれよ、此の頃の、五月雨サメグレの空ソラにて、雨も降りさり止みさりしてある頃よあ
らすやとの心なり、少女子コトメが打垂髪ウチケレガミの、亂ミだれてある故よ、五月雨サメグレをいふ序言ハシゴトと
して、枕詞マシゴトの如くしていへるなり、まさ、をちりへるとの、本モトよ復カへるをいふ、

兄の、唯ただど、雨中の郭公を詠みよるなり、

をこめ子コがうちふれ髪カミの五月雨サメグレの

空ソラよそれでも鳴ナくほととぎす

讀人志らず

つゝめどもかくれぬ物モノも夏虫ナツムシの

身ミよりあまれる思オモひなりけり

此の歌の、後撰集よ出でさる歌よて、歌の意の、螢も、己が光の、人よ見すまじと、包み隠す事ならんが、奈何しても、隠れぬ物の、其の身より餘りて見ゆる光なり、人も、まよ、此くの如くよて、人を戀ひ慕ふ心の、人よ見えじと隠してこそあれど、其の容子の、ともすれば、隠し難くて、人よ見咎めらるゝやうなる事のあるよとの心なり、兄のも、同じ心なり、

夏虫の身よりあまれる思ひこそ、

つゝめごゑるく人よ見えけれ

紀貫之

ひぐらしの聲聞く山の近けれを

鳴きつるなべよ入日さすらん

此の歌も、後撰集よ見えさる歌よて、其の意の、茅蜩といふ蟬の鳴く山の近き故よ、此の麓の里よての、其の聲を聞くと齊しく、入日の映す事ならんとの心なり、兄の、少し、其の心を變へて、次の如く詠みさり、

ひぐらしの聲の間遠よなるなべよ

夕日の影をうすれてぞ行く

讀人志らず

水無月のなごしの祓する人を

千年のいのち延ぶといふなり

此の歌の、拾遺集に見えたる歌にて、其の意の、六月の大祓する人の、千年の命も延ぶといふ事なるよとの心なり、なごしの祓とい、夏越の祓にて、すなまじ、六月晦日とする大祓の事なり、兄のも、同じ心なり、

命さへ延ぶといふなる水無月の

なごしの祓おこたるなゆめ

秋の歌

讀人志らず

我が背子り衣のすそを吹きさりへし

うらめづらしき秋のそつ風

此の歌の、古今集に見えたる歌にて、其の意の、秋となりたる今朝の風の、涼

しく清ら^{チヨ}よて、心めづらしく覺ゆるよとの心なり、上句^{カミクマ}の、下句^{シモクマ}のうらといふ語をいひおこさんとして、言ひつゞけざる序の詞なり、まさ、吾が背子^{セコ}とい、我^ワが夫^{ウツト}といふは同じく、うらとい、心^{ココロ}、まさ、氣^キなどいふは同じ、されば、此の歌の、女の詠みざるやうなれど、男なりとの説もあれば、此の篇は入れざり、さて、兄も、亦さ、秋の初風を詠みざり、

五六

朝顔^{アサガハ}の垣根^{カキネ}は今朝^{アサ}もそよめきぬ

吹く^{フク}さしもなき秋^{アキ}のそつ風

安貴王^{ヤスタカノオホキミ}

秋^{アキ}たちて幾日^{イクラカ}もあらねむこのねぬる

あさげの風^{カゼ}もたもとさむしも

此の歌の、萬葉集に見えざる歌よて、其の意の、秋^{アキ}はなりさといへど、未^ミ幾日^{イクラカ}といふ日もたぬよ、今朝^{アサ}の風の、袂^{タモト}を吹くよ、すこし涼しく覺ゆるよとの心なり、寒^{サム}しとい、涼^{スズ}しき事の甚^{ハナハダ}しきをいふ語なれど、歌などよの、さのみもあらで、上代^{ウヘノ}の、涼^{スズ}しと同じ意よいへるなり、此の歌も、拾遺集^{シユイシツ}の、袂^{タモト}涼

しもとして載せり、さて、兄の、

このあさけ涼しき風の秋たつこ

思ふころよやごりてや吹く

此の本歌の作者の、聖武天皇の御代の頃の人なれど、其の傳記など詳らうならず。

紀貫之

萩の葉よそよぐ音こそ秋風の

人は知らるゝもじめなりけれ

此の歌の、拾遺集に見えたる歌にて、其の意の、秋風の、後よの、嵐とも、野見きともなりて吹く事なれど、此の秋風の、もじめて、人は知らるゝの、萩の葉よそよぐ時の風の音よてあるよとの心なり、兄の、唯、秋風を詠みり、

萩よ吹くものごなりたる秋風を

けさこそ知るくそよぎそめけれ

讀人志らず

鳴きこぼる雁のなみどや落ちつらん

物おもふ宿の萩のうへの露

此の歌は、古今集に見えたる歌にて、其の意は、秋の癖として、物事のみ思ひて居る宿の萩の上より、露も、たまりて見ゆる事なるが、此は、尋常の露のみよのあらず、空を鳴きこぼる雁も、物憂き秋をあひてこそ鳴く事ならめ、されば、其の鳴く雁の涙の落ちて、此く、露の、多くたまりて見ゆるならん、哀れなる

事よとの心なり、兄の、同じ心なれど、詞をかへて詠みたり、

物おもふ宿の芝生の鳴く雁の

なみどの露のおくりとぞ見る

藤原守文

草の原はぬく白玉と見えつるも

秋のむすべる露よぞありける

此の歌の、後撰集に見えざる歌にて、其の意の、野邊の草原クサハラよ、白き玉シロタマが貫スきつらねてあるよと見えしに、玉よのあらずして、秋の、此の氣候キコウの結びムスぶる露ツユよてありしぞ、露ツユも、野よおきざるを見れば、白玉シロタマを亂ミしユるが如くよて、美ウツクしき物なるよとの心なり、兄ケイのも、同じ心なれど、詞をかへさり、

浅茅生アサチヲフよぬく白玉シロタマを月影ツキカゲの

むすべる秋アキの露ツユよぞありける

此の本歌の作者、藤原守文の、右馬助有數の子なりといへど、其の傳記など、今、此よの考へ得ず、

紀貫之

秋の野よみどれて咲ける花の色イロの

千種チユよ物モノをおもふころかな

此の歌の、古今集に見えざる歌にて、其の意の、秋の野よの、種々の草クサもありて、色々いろくよ咲きみどれてあるよ、其の花のひとつならぬやうよ、自身自身の、此の頃頃の、種々の事コトを、心の休やすむ時もなく、思おもひ惱なやみてあるよとの心なり、兄ケイの、同じ心なれど、花を、虫よかへて詠みさり、

秋の野の千草よすどく虫の音の

ひとつよをあらず物ぞかなしき

九河内躬恒

妻こふる鹿ぞ鳴くなる女郎花

おのらすむ野の花と志らずや

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、妻を尋ねて鳴く、鹿の聲が聞

ゆるぐ、鹿の、女郎花を、何と見ふるり、女郎花の、己が住める野よこそ咲き
てあるよての無きりとの心なり、此の、女郎花を、女としていへるよて、妻も
女なれば、女の居るよ、何とて、まよ尋ぬるりといへるなり、兄の、唯ぞ、秋
野の鹿を詠みより、

女郎花咲きこぼれさる秋野よそ

妻こふる鹿の聲ぞ絶えせぬ

源順朝臣

水の面ミヅノオモは照アキる月ツキなみをかぞふれむ

今宵コヨヒぞ秋アキのもなりなりける

此の歌の、拾遺集に見えたる歌よて、其の意の、七月八月といふやうよ、月々ツキトクの並びナラを数へて見れば、今宵の、秋の最中モナカよてあるよ、月の、鏡の如くよて、水ミヅは映ウツれるを見てても、秋の月の真盛マサカサなるよとの心なり、月ツキなみとい、月の並びよて、上カミの水の縁エシよて、波ナミを兼ねていへるなり、兄の、唯タぞ、中秋の月を詠

みさるなり、

この原ハラ八十島ヤソシマあふぐ空ソラの海ウミよ

秋アキのもなりの月ツキをうらびぬ

読人志らず

我ワがこゝろなぐさめかねつ更科サラシナや

をむすて山ヤマは照アキる月ツキを見て

此の歌の、古今集に見えざる歌よて、其の意の、秋アキよなれば、物事モノコトよつけて淋
しき事なるよ、自身ミツカラの、今度コノタビ、信濃シナノよて、姨捨山アハスチヤマの月を見て、何ナニとなく物哀し
くなりて、心ココロも慰なぐさますなりしよとの心なり、さるの、姨捨山アハスチヤマよの、姨捨アハスチの物語
もあれど、先輩ゼンバイの説の如く、此よての、然サる物語の爲ためよ慰なぐさまざりしよのあら
ず、月ツキを見ての事なり、いづくの月を見ても、同じ事なり、さて、兄ケイの、更サラ
科シナの秋の、鹿も紅葉もあれど、姨捨山アハスチヤマの、月のひとつよて、聞キコえてある事よと
て、次の如く詠みさり、

更科サラシナの秋アキを千種チグサよ見ゆめるを

月ツキよのみ聞キくをむすての山ヤマ

讀人志らず

志シら露ツユを玉タマよなしふる長月ナガツキの

有明アリアケの月夜ツキヨ見れどありぬりも

此の歌の、萬葉集に見えざる歌よて、其の意の、秋アキの末スエの夜ヨふけの月影よて見
れば、草葉の露の、玉の如く見ゆるが、露を、此カく、玉の如くしふるの、有明アリアケ
の月よて、此の月影の、見てもく飽アりぬ事よとの心なり、長月ナガツキとの、今の十

月、昔の九月よて、有明アリアケの月とい、望ミツより後の月の事なり、兄の詠みよるも、同じ意よて、唯タゞ、其の詞をかへよるのみなり、

有明アリアケの月ツキのみツキがける志タマら玉タマを

秋アキの末野スエノの露ツユよぞありける

讀人志タマらず

小夜中サヨナカと夜ヨをも更フけぬらし雁カリが音ネの

きこゆる空ソラよ月ツキよふる見ミゆ

此の歌も、萬葉集よ見えよる歌よて、其の意の、雁カリの聲の聞ゆる空ソラよ、月の出でよるを見れば、夜ヨも更フけよる容ヨウ子スなりといふ心なり、小夜中サヨナカといふと、同じ意よて、小サの、唯タゞ、輕カヨく添ソへていへるなり、まゝ、雁カリが音ネとい、唯タゞ、雁カリの事をもいひ、まゝ、雁カリの鳴く聲をもいへるが、此よての、雁カリの聲をいへるなり、さて、兄の、今、すこし、夜ヨふけの、狀サマをいもんとて、次の如く詠みより、

小夜サヨふけし影カゲこそ見ミゆれ雁カリが音ネの

鳴ナくなる空ソラよ月ツキかよぶきぬ

大江千里

月ツキみれむちまは物モノこそかなしけれ

我が身ミひとつの秋アキよそあらねど

此の歌の、古今集よ見えざる歌よて、其の意の、つくぐくと、月ツキをみて居イれば、いにしへ、今イマ、こなかなと、心も、身も、包ツりれくまなりて、物事モノゴトよつきて、身よしみて覺オホゆるが、此の何故ならん、秋アキといふの、我が身ひとつの上よのあらで、總スべての物よある事なるを、我ワレのみの如く覺オホゆるの、何故ならん

との心なり、兄のも、亦ナ同じ心なり、

月ツキ見れむ秋野アキノよすどく虫ムシの音ネの

ちぐさよ物モノのおもほゆるかな

在原業平朝臣

大方オホカタを月ツキをも愛メでじこれぞこの

つもれむ人ヒトの老オいとなるもの

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意の、月の、愛でよき物ぞとて、昔より、人の愛づる物なれど、自身、大抵の、月の愛でじと思ふ、夫れ、此の月が積れば、年も重りて、人の老いとなる物なればなりとの心なり、されば、兄も、同じ心を詠みより、

物おもひのつくご知るく秋こいへむ

なご月のみを人の愛づらん

此の本歌の作者、在原業平朝臣の、阿保親王の第五子よて、清和天皇の御代の頃の人なり、此の人の、和歌を善くせしのみならず、氣節も有りし人よや、惟喬

親王の、小野の里よ行き通ひしも、世を憤りしすさびとぞ覺ゆるや、

土師宿禰道長

ぬぞふまの夜も更けぬらし玉くしげ

ふりみ山よ月かふぶきぬ

此の歌の、萬葉集に見えたる影よて、其の意の、大和の、此の二上山の月も、入方よなりしを見れば、今宵も更けたる事ならんとの心なり、ぬをよまの、夜よかけたる枕詞よて、玉くしげの、ふよかけし枕詞なり、兄のも、同じ

心なれど、少し、詞をかへより、

ふらりみの山よかゝるぶく月影よ

夜ふけし空の色ぞ見えける

此の本歌の作者、土師宿彌道良の、聖武天皇の御代の頃の人なれど、其の傳記の詳らりならず、

紀貫之

逢坂の關の清水よ影見えて

今や引くらん望月の駒

此の歌の、拾遺集に見えたる歌にて、其の意の、秋の半よの、駒迎とて、信濃の牧より奉る駒を、逢坂の關にて迎ふる事なるが、其の望月の牧の駒の、望月と、月の名もあるよ、秋の半の八月十五夜の、望月よてもある事ゆる、定めて、關の清水よの、影も映りて引らるゝ事ならんとの心なり、兄の、關の清水の世よ聞えざるを詠みざるなり、

望月の駒の影より逢坂の

關の清水の世は流れけり

七八

紀貫之

かつ見れどうとくもある哉月影の

いふらぬ里もあらじとおもへぞ

此の歌の、古今集に見えたる歌にて、其の意の、躬恒といふ人の、明月に乗じて訪ひ來さるが、訪ひ來さるの嬉しけれど、能く思ひて見れば、まゝ嬉しうらぬ方もあり、其の故の、躬恒の、月を見よ來さるなれば、自身の方のみよ來さ

るよのあらず、月の、何方までも照らすやうよ、何方でも、月を追ひて往りぬ方も有るまじと思へば、親切の親切なれど、少し、物足らぬ心地もするよとの心なり、然れば、兄の、貫之の詞を、尤なりとして、次の如く詠みさり、

これをもみ思へむこそあれ月影よ

たぐへる人もむつまじみすな

讀人志らず

秋萩の下葉いろづく今よりや

七九

ひとりある人をいねがてよする

此の歌も、古今集よ見えさる歌よて、其の意の、秋も、やうく開けて、此の頃、萩の下葉も、すこし黄をみて見ゆるが、此く、秋も夜長よなりさる今頃より、一人寝する人の、傍淋しくて、寝難くする事ならんとの心なり、兄のも、同じ心なり、唯ぞ、萩を、鹿よかへさる迄なり、

妻ごひよ鹿の鳴くなる頃よりぞ

かさしく袖を露けりりける

清原深養父

河霧のふもとをこめてたちぬれむ

空よぞ秋の山を見えける

此の歌の、拾遺集よ見えさる歌よて、其の意の、秋の山の麓の、麓をめぐれる河霧よ取りかこまれて見えぬ故よ、山の、空中よ立てるが如く見えてあるよとの心なり、兄のも、同じ心なり、

雲霧の麓こむれむ看るくよ

空の物とも山をなりつゝ

本歌の作者、清原深養父の、筑前介海雄の孫にて、豊前介房則の子なりといふ、まゝ、一説より、内匠允よて、藏人所の雑色なりともいへり、

紀貫之

かきくらしまぐるゝ空を眺めつゝ

思ひこそやれ神南備の森

此の歌も、拾遺集に見えざる歌よて、其の意は、此の曇りて、時雨の降る空を眺むれば、神南備山の森の事が思ひやらるゝよ、此の時雨よてこそ、森の木の葉は、みな紅葉して、秋の景色は、いよゝく深くなる事よてあらんとの心なり、兄も、同じ心を詠めり、

神無月時雨の雨を神南備の

森の木ノ葉よまづぞかゝれる

讀人志らず

霧たちて雁ぞ鳴くなるかふをりの

あしふの原も紅葉しぬらん

此の歌の、古今集に見えたる歌よて、其の意の、秋も、やうく／＼開けて、霧も
發ち、雁も鳴くを、さての、片岡の朝の原のいりどあらん、定めて、木々も、
今の紅葉して、見事なる事ならんとの心なり、片岡の、山城ももありといへど、
此の、大和の片岡なるべし、兄の、同じ心なれど、霧をも、雁をも、片岡の

物として詠みさり、

霧たちて雁ぞ鳴くなる片岡の

秋も今こそこのひぬらめ

讀人志らず

かりがねの鳴きつるなべも唐ころも

たつ田の山も紅葉しよけり

此の歌の、後撰集に見えたる歌にて、其の意の、今、雁が鳴きくるぞと思ひて見れば、立田山の木の葉の、みな色づきて、秋の景色となりたるの心の心なり、唐ころもの、たつといふは繋けたる枕詞なり、兄のも同じ心なれど、兄の、立田山と、山を定めずして詠みたり、

雁が音の鳴きて過ぎよしあしより

山の木の葉も色づきよけり

柿本人麻呂

つまこもる矢野の神山露霜よ

匂ひそめり散らまく惜しも

此の歌の、萬葉集に見えたる歌にて、其の意の、山の木の葉も、露霜にて、紅葉したるが、さての、散る事も近らんよ、惜しき事なるよとの心なり、つまこもるの、矢よかけていふ枕詞にて、矢野といふ地の、伊豫、備後、播磨などよもあれど、出雲よもあれば、此よ詠めるの、出雲なるべし、神山ともいひ、

まゝ、人麻呂の居られし石見よも近ければなり、まゝ、露霜との、露の、半分
の、霜よなりてあるをいふ、露と霜とのふつよのあらず、まゝ、匂ふとの、
今の、常よ、鼻よ受くる香をいへど、古の、目よ映る色をもいへり、さて、
兄も、同じ心なれど、詞をかへて詠めり、

露霜よあらそひかねて孀ごもる

矢野の神山色づきよけり

紀貫之

白露も時雨もいふくもる山を

下葉のこらず色づきよけり

此の歌の、古今集よ見えざる歌よて、其の意の、近江のもる山といふの、露も、
時雨も、いさく漏る故よ名づけざる名りと思ふが、今見れば、木々の下葉の、
残らず色づきより、さての、さぞかし、露時雨を、幾度も受けての事ならんと
の心なり、兄の、其の心をかへて、次の如く詠みより、

山津見の神もる山を秋たけて

木々の紅葉ぞ幣と散りける

読人志らず

秋風の吹きと吹きぬるむさし野を

なべて草葉の色かきりける

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意の、秋風の吹きたる上よも、まゝ

武藏野の原の、すべての草の色、みな變りて、秋の晩の景色よ、全くなりたるよとの心なり、兄も、同じ心を詠めり、

時雨よぞ染むごおもひし武藏野の

草を風よも色づきよけり

紀友則

露ながら折りて挿さん菊の花

九二
老いせぬ秋のひさしりるべく

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、菊の花の、其の露を着けながら折りて、挿す事よせん、然る時の、菊の花も萎まぬ上よ、菊を挿せば、老いせずといへば、此の秋も久しく、我が身も、齡を延ぶべしとの心なり、此くいふの、九月九日は、菊を挿し、まさ、菊の露を、綿よつけて、身を摩づれば、老いせずといふ事のあればなり、兄のも、同じ心なり、

菊よおく露を千年も延ぶてふを

かざむ秋も老いずぞあらまし

讀人志らず

時しもあれ秋しも人の別るれむ

いとたもとぞ露けりりける

此の歌の、拾遺集に見えざる歌にて、其の意の、時もあるべきよ、此の物悲しく淋しき秋を、故さらよえらびて、人の別るとの、何の心ぞや、夫れ故よ、自

身の袂カミナの、かやうよ、早く露ツユけくなりさるぞとの心なり、兄も、同じ心を詠み
ふり、

さらでどに悲カナしき秋アキを露ツユよさへ

濡ヌれそぼちつゝ、こりれをぞする

冬の歌

讀人志らず

神無月カミナ降りみ降ツらずみ定めなき

志ぐれぞ冬フユのそじめなりける

此の歌の、後撰集に見えさる歌よて、其の意の、神無月カミナの、冬フユのそじめの月な
るが、冬フユのしるしと見る物の、何ナニならんと思ひ居イりしよ、時雨シグレの降ツり止
み止りして、空ソラの容子ヨウジの定サらずテあるが、此の定めもなく降ツる時雨シグレこそ、冬
のそじめよてあるよとの心なり、兄も、亦モさ、其の心を詠めり、

神無月カミナ風フキさへ添ツひテ寒サムく降ツる

時雨シグレぞ冬フユのそじめなりける

讀人志らず

神無月時雨とともに神南備の

山の木の葉を降りよこそ降れ

此の歌も、後撰集に見えざる歌にて、其の意は、神無月よ、時雨の降るは、常の事なれど、此の神南備山の、時雨と俱は、木の葉も、雨の如くなりて降りて来るはとの心なり、兄のも、同じ心なれど、神南備山を、藪並の里よかへり、此の、紅葉の外の木の葉をいもんが爲なり、

神無月紅葉ともなき木の葉さへ

散りよ散るなり藪並の里

讀人志らず

妹許と馬よ鞍おきていこま山

うちこえ來れど紅葉散りつゝ

此の歌の、萬葉集に見えざる歌にて、其の意は、今日の、思ふ人の許は往らん

とて、馬よ、鞍おきて、打騎りて、膽駒山よかゝると、秋の末の事とて、行手の道よの、紅紫が散りまがひてあるよとの心なり、妹許との、妹の家といふよ同じ、まさ、往くを、いくともいへば、鞍おきていくを、膽駒山の、いこよかけていへるなり、兄のも、同じ心なり、

妹がりこいこまの山を越え來れむ

こゝろあるらし紅葉散りつゝ

讀人志らず

立田川もみぢ葉なぐる神無備の

みむろの山よ時雨降るらし

此の歌の、古今集よ見えざる歌よて、其の意の、今日の、此の立田川よ、紅葉が流れて居るの、定めて、みむろの山よ、時雨の降りし事ならんとの心なり、立田川、神南備、みな、大和よある地名なり、兄のも、同じ心なり、

紅葉のながると聞けむから衣

立田の河ぞおもりげよたつ

讀人志らず

今朝のあらし寒くもある哉足引の

山かきくもり雪ぞ降るらし

此の歌の、後撰集よ見えざる歌よて、其の意の、今朝の嵐の、常の嵐とのかをりて、殊の外は寒く思ふが、此の、山々よ、雪の降りざるならんとの心なり、兄のも、同じ心なり、

雪吹きて來さる嵐やむすびけん

うすらひ浮ぶ溝川の水

讀人志らず

氷こそ今もすらしも三吉野の

山の瀧津瀬聲もきこえず

此の歌も、後撰集よ見えざる歌よて、其の意の、冬も、漸く寒くなりて、諸方

よ、氷を結びさるらしくて、此の吉野山の瀧の音も、今の聞えぬぞとの心なり、
兄のも、同じ心なり、

瀧の音も今朝をきこえずおぼつりな

こほりやすらし三吉野のさこ

山部 赤人

田子の浦ゆうちいで、見れむ眞白よぞ

ふじの高嶺も雪を降りける

此の歌の、萬葉集に見えさる歌にて、其の意の、今朝、田子の浦より、ふと見
れば、富士の高嶺の、眞白となりて、雪が降りてあるの、此のいりなる事ぞと
の心なり、ゆといふの、よりといふは同じ、兄の、まさ、富士の雪の、赤人の、
此の歌より、世は高く聞えさるならんとて、次の如く詠みより、

神さびて高くたふとき富士の嶺の

雪を君こそあふぎそめけれ

此の本歌の作者、山部赤人の、其の傳も詳らならず、されど、詠歌の序などより思へば、聖武天皇の御代の頃の人にて、其の歌は妙なりし事の、時代の、柿本人麻呂よりも後れされど、人麻呂と並びて稱せられし事の、奈良の頃、とやう、其の沙汰もありしや、大伴家持の歌の詞書は、幼年にして、未だ、山柿の門を還すと書きさるるまでも知られり、

鎌倉右大臣

ものゝふの矢並つくるふ小手のうへよ

あられたむしる那須の志のそら

此の歌の、鎌倉右大臣集に見えさる歌にて、其の意の、武士の、弓射るとして、那須野にして、矢並をつくるひてある小手の上よ、篠原の、寒き處として、俄りよ、霰降り来て飛びむしるよとの心なり、兄も、大やう、同じ心を詠みより、

小手のうへの霰の音よものゝふの

矢さけび遠さ那須の篠原

此の本歌の作者、鎌倉右大臣の、源頼朝の第二子にて、鎌倉の第三代の將軍な

り、此の人、和歌を好み、殊よ、萬葉集の古調を好みさりと云ふ、家集よの、
金槐集あり、

一〇六

深山よを霰降るらし外山なる

讀人志らず

まさ木のかづら色づきよけり

此の歌の、古今集よ見えよる歌よて、其の意の、奥山の、霰よても降るらしく
ある、端山の正木のかづらも、赤き色がつきて來よるよとの心なり、外山との、

奥山よ對して、入口の山をいへり、兄も、同じ心を詠みさり、

深山よを秋たけぬらし外山なる

木の葉みながら色づきよけり

讀人志らず

まさむくの檜原もいまど雲居れむ

小松がうれゆ沫雪ながる

一〇七

此の歌の、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、參向山の檜の木の原の、未だ曇りもせぬよ、こや、麓の小松の原の、沫雪流れてあるよ、奥山と端山と、かやうよ違ふものよやとの心なり、參向山の、大和のある山にて、小松がうれといふの、小松の末といふ事なり、さて、兄の、詞をかへて、次の如く詠みよ

一〇八

卷向の檜原の夕日かげろへむ

小松が原よ小雨降るなり

藤原敦忠朝臣

物おもふと過ぐる月日もあはれ間よ

今年も今日よをてぬとり聞く

此の歌の、後撰集に見えざる歌にて、其の意の、物おもひよ、心も暗れまどひて、月日の過ぐるも知らずでありしよ、今聞けば、今年も、今日よて暮れぬと、自身の心よての、然りとも思わざりしを、さての、此の年月の、我が身の、夢のやうよて過ぐしるよとの心なり、兄のも、同じ心なり、

何^{ナニ}す^カも無^クくて^スすぐし、怠^{オシ}りの

おごろりれぬる年の暮^クれ哉^カ

此の本歌の作者、藤原敦忠朝臣^{フナハラノツタケノサダメ}の、左大臣時平^{サダメノトキヘイ}の子^コにて、醍醐天皇^{タケミカドノミコ}の御代^{ミコトノヨリ}の頃
の人^{ヒト}なり、此の人、和歌^{ワカ}を好み、まさ、音律^{オンリツ}も通じ^トりといふ、さればよや、
琵琶^{ヒハ}中納言^{ナカノナリ}などとも稱^ナせられ^レたり、

戀の歌

柿本人麻呂

三熊野^{ミクマノ}の浦^{ウラ}のそまゆふ百重^{ヒャクヘ}なす

こゝろをもへどたゞ逢^アをぬかも

此の歌の、萬葉集^{マンヤクシュ}に見えたる歌にて、其の意の、熊野^{クマノ}の浦^{ウラ}は生えたる濱木綿^{ハマユヅメ}と
いふ草の、芭蕉^{バセウ}よも、萬年青^{マンネアヲ}も似て、其の葉の、幾重^{イクヘ}も重^{カサナ}りてあるが、其の
濱木綿^{ハマユヅメ}の如く、自身^{ミツカラ}の、重^{カサナ}ねくも、人を思^{オモ}ひて居^イれど、人の、自身^{ミツカラ}の心^{ココロ}も知^チ
らぬよや、直^{ナホ}逢^アふ事^{コト}も出来^イぬの、さてく歎^{ナゲカ}しき事^{コト}なりとの心^{ココロ}なり、されば、

兄の、少し、心をかへて、次の如く詠みより、

一一三

三熊野の浦のそまゆふ一重どに

へどてぬ妹もなぞも逢ひがなき

此の本歌の作者、柿本人麻呂も、其の傳記詳らりならず、されど、其の歌の詞書などは依れば、天武、持統、文武の朝の人よして、聖武天皇の御代までの存らへざりしやうなり、此の人、歌の神の如くよて、其の社といふも、播磨、石見など、諸處に在りといふ、

柿本人麻呂

大津皇子

足引の山のまづくは妹待つと

これ立ち濡れぬ山のまづくは

此の歌も、萬葉集に見えたる歌まで、皇子の、石川郎女は贈られたる歌なり、歌の意の、隠れたる方も無ければいそねど、二句の山の雪を、折返して、まゝ、五句は置きさり、此の、其の事を、切實に言ふ時の一格なれば、心は味ひて悟らるべし、さて、石川郎女の、此の歌の返しをしより、其の歌の、

一一三

吾を待つと君が濡れけん足引の

山の志づくよならましものを

さて、兄の、此の贈答の歌を題よして、次の二首を詠みより、

雨もれて雫まゝる木の下よ

濡れても人を待つ夜ごろ哉

濡れてさへ待てりぞ知らむ雨をるゝ

木の下露よならましものを

此の本歌の作者、オホツノイコ大津皇子の、天武天皇第三の御子にて、シイカ詩歌など善くし給ひしよ、ホウギョ天武天皇崩御の後、シノチ新羅の僧の、ジンシン人臣の相よあらずと言ひしよアト惑ひて、ムカシ謀反し給ひしよ、事あらもれて、終よ、二十四歳まで、死罪よ行それ給ひき、イシカハハ石川郎女の、ツマビ其の傳記詳らりならず、

柿本人麻呂

たらちねの母のかふこのまゆごもり

こもれる妹を見るよしもがな

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、母の養ひて居る蠶の、繭を籠りて居るやうよ、外に出でずよ、内のみ籠り居る人を、何とりして、見よものよとの心なり、兄のも、詞のかもれど、同じ心なり、

息の緒よかけてぞ忍ぶたらちねの

母のかふ蠶のこもりづませや

讀人志らず

朝寢髪を梳らじうつくしき

君が手まくら觸れてしものを

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、此の朝寢髪、亂れそめて梳りて直す事のすまじ、此の髪、かむゆく思ふ人の手枕は觸れて亂れざる物なれば、梳りて直すも、惜しき心地すれば、此の儘よておくよとの心なり、兄のも、詞のかへされど、同じ心を詠みより、

朝寝髪見れむうつくし夜もすから

誰が手まくらよ乱れやせし

讀人志らず

難波人葦火たく屋のすしふれど

おのが妻こそとこめづらしき

此の歌も、萬葉集に見えよる歌にて、其の意は、難波の、葦の、多くもゆる地

とて、竈も、葦のみ焼く事なれば、煤烟の發ちて、人も煤烟よふすぼりて、汚くのあれど、我が妻なりと思ひて見れば、いつも愛づらしくてあるよとの心なり、常めづらしとの、いつも變らず愛づらしきをいふ、さて、兄の、葦火たく妻の状を思ひやりて、戯れて、次の如く詠みより、

葦火たくけぶりよむせて難波女の

まぶさふすぶる顔を見せつゝ

大伴宿禰像見

いそのかみふるとも雨よさをらめや

妹よ逢をんといひてしものを

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、假令、雨の降るよもせよ、雨の爲よ、約束の違へず、人よの、既よ、逢をんといひざるものを、何とて、其の詞を反故よすべきぞ、決してせずとの心なり、大和の石上神社の、布留といふ地よあれば、其の布留といふを、雨の降る、降るといふ語よしていへるな

り、兄の、まよ、例の語をかへて詠めり、

故さらよ濡れても行けん袖の上の

露を妹こそ打ちももらそめ

此の本歌の作者、大伴宿禰像見の、孝謙天皇の御代の人なれど、其の傳記の詳らりならず、

讀人志らず

足の音せず行けん駒もがかづしりの

眞間の繼橋やまずかよえん

一三三

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意は、下總の眞間は居る女の許よ、忍びて通せんと思へども、兎は角よ、人は知らるれば、足の音を發てぬやうなる駒の無きものり、有れば、夫れは乗りて、眞間の繼橋を、次々と絶えず渡りて、通ひさきものなりとの心なり、もがとの、願ひ求むる心をいふ辭なり、繼橋との板を、繼ぎ並べて渡しさる橋にて、駒よて行けば、足の音も高く聞ゆるものなり、兄のも、同じ心を詠みさり、

人知れず行らん駒もががづしりの

眞間の繼橋おとたりくとも

讀人志らず

玉くしげあけまく惜しきあふら夜を

ころも手かれずひとりかもねん

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意は、今夜は、夜の明くるのも惜しき程の夜なるよ、自身は、いつもの如く、今宵も、亦、一人寝する事りと思

一三三

へば、哀^{カサシ}みよ堪^タへぬよとの心なり、衣^{コホモテ}手かれずとの、袖^{ソデ}を枕^{マクラ}とする、一人^{ヒトリ}寝^ネの袖^{ソデ}よ別^{ワカ}れぬをいふ、二人^{フタリ}よて同^{トモ}寝^ネすれば、此の袖^{ソデ}よ別^{ワカ}るべきなり、されば、兄^{ケイ}の、其の一人^{ヒトリ}寝^ネを、今、すこし強^{ツヨク}く言^イふんとて、次の如く詠みさり、

二人^{フタリ}してむすびし紐^{ヒモ}をあさら夜の

こよひも解^トりて一人^{ヒトリ}りも寝^ネん

讀人^{ヨミ}志^シらず

三島江の玉江の菰^{コモ}をふめしより

おのがとぞ思^{オモ}ふいまど刈^カられぬど

此の歌も、萬葉集に見えたる歌にて、其の意の、津^ツの國の玉江^{タマエ}の菰^{コモ}、未^ミだ刈^カり取らねど、既^イよ、我^ワが物として占^シめされば、自身^{ミツカラ}の物と思^{オモ}ふが、其の如く、女^メよも、約^{ヤク}束^{ソク}しる上の、未^ミだ逢^アひこそせね、自身^{ミツカラ}の妻^{ツメ}と思^{オモ}ひて居る事よとの心なり、されば、兄^{ケイ}の、まよ、菰^{コモ}の心よなりて、菰^{コモ}の、占^シめられてありても、其^{ソノ}れのみよての、安^ア心^{シン}も出^デ來^キねば、下^シりさちて、刈^カりとる人をこそ、日^ヒ夜^ヤよ待^マちをさりてある事ならめとの心よて、次の如く詠みさり、

おりさちて刈^カる人をこそ三島江^{ミシマエ}の

玉江の菰を待ちこゝりけめ

柿本人麻呂

伊勢の海人の朝菜夕菜よかづくといふ

あそびの介のかゝおもひよして

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、伊勢の蟹の、朝夕、海に入りて取るといふ鮑の介の、片介にて、一方の、介の無きが、其の鮑の如く、自身、一人にて、人を思ひて居るよ、人の、自身を思ひてもくれぬよとの心なり、

り、潜くといふの、潜くといふと言ふべきを、約めていへるなり、といふを、とふとも、ちふとも、てふともいふなり、まさ、伊勢の海人より、潜くといふまでの、鮑を言ふんとての序の詞なり、まさ、朝菜夕菜といふも、朝の食物、夕の食物といふ義なれど、後よの、唯、朝夕の事としていへり、總て、菜といふの、食物とする物をいひて、野菜の固より、魚鳥果麩、何よても、食物とする物の、菜といへり、肴を、さりなといふも、酒は副へて食ふ物をいふなり、魚類を限りて言ふよのあらず、さて、兄も、同じ意を詠みされど、兄の、鮑といふより、一方よ、介のなきを、詮の無きよ兼ねて詠みたり、

伊勢の蟹のかづく鮑の逢もずして

見るよかひなき片思ひぞする

柿本人麻呂

をとめらが袖ふる山の瑞垣の

久しき時ゆおもひきこれそ

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、自身ミツカラの、久しき前チキつりより、心よかけて思ひて居る事なれど、人の、さりともしおもぬげよてあるの、歎ナゲりしき事なり、其の故よや、人の、兎角トカクよ、おほよそよてあるよとの心なり、瑞垣ミツガキとの、久しといふ時の枕詞マクラコトバよて、此よての、大和の袖振山の神社ヤマトソデフルヤマヤシロよある瑞垣ミツガキより呼びおこし、袖振山ソデフルヤマの、まよ、少女等コトメラの、袖を振りて、人を招マネきなどもする故よ、少女等コトメラがといへるなり、さて、兄の、すこし、心をかへて詠みより、

をこめらが袖振山のふりもへて

來つこそ妹よ我が告げなくよ

讀人志らず

思オモもぬをおもふといモまマ眞鳥トリすむ

うなでの森の神カミしゑらさん

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、自身ミツカラの詞コトバを、人ヒトの、嘘ウソのやうよ思ひて居る容子なれど、決して、嘘ウソよてい無し、若し、思ひもせぬものを、思ふなど、嘘ウソをいモバ、それこそ、大變タイヘンの事よ、此の大和ヤマトの宇名手ウナデの杜モリよの、事コト代主シロヌシの大神おもします、此の大神の、善惡ともよ、一言ヒトコトよ言イひモなチ給フ大神

なれば、自身ミツカラのいふ詞コトバの、實マコトり、實マコトならぬりといふ事コトの、直ナホよ知シろしめす事コトなりとの心なり、眞鳥マトリとい、驚ワシの事なり、さて、兄ケイの、少し、心をかへて詠みよ

眞鳥マトリすむ宇名手ウナデの杜モリの神カミかけし

この言コトの葉ハのうつりやえする

三方沙彌

たちぞなの陰カゲふむ道ミチのやちまふよ

物をぞおもふ妹は逢はずして

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、橋の木陰の、人の行く道もあるが、其の道の、八方は岐れてあるやうよ、自身、妹は逢ひよき爲よ、彼此と、種々は物思ひするよ、何故は逢ひ難きりといふ意なり、妹との、若き女をもちひ、妻の女をもちへり、兄のも、同じ心なり、

妹は逢ひし道もやあるごたち花の

陰はむりしを志のびてぞ来る

此の本歌の作者、三方沙彌の、其の傳記詳らりならず、

讀人志らず

妹がりと我がかよひ路の篠すゝき

これし通をなびけ志のをら

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、自身の、女の許へと通ひて行く道よ、生えざる篠薄の、自身の行く時よ、打靡きて、道を開けてくれよとの心なり、妹許との、女の許といふ義なり、兄の、すこし、其の心を變へよと、

妹イモがりごかよふ秋野アキノの篠セすキ

忍シびてをあれ穂ホよいづなゆめ

讀人志らず

いそのかみ布留フの高橋カハシたりだりよ

妹イモり待マつらん夜ヨぞふけよけり

此の歌も、萬葉集に見えたる歌にて、其の意の、大和ヤマトの石上イソノカミの布留フよの、高橋カハシ

とて、高き橋カハシあるが、其の橋の高きやうよ、人の、我ワを、今イマりくと、待ちて居る事なるべきよ、此の夜ヨも、いよく更フけされば、待マつ身ミよなりての、さぞりし、もどろしく思オモひて、何をして居るかと思オモひて居る事ならんとの心なり、兄ケイのも、同じ心なり、唯タゞ、橋カハシといふ語コトを活イりさん爲ナよ、かくといふ語コトを用ヨひよる迄マなり、

石イシの上布留カミフの高橋カハシかけて思オモふ

妹イモり待マつらん小夜コヨふけよけり

讀人志らず

千早振神のいがきも越えぬべし

今も我が名の惜しげくも無し

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意ハ、神社の忌垣ハ、かりそめも越ゆる事ハ、出来ぬ物なれども、夫れも越えずハ、逢それずとの事ならば、越えもすべし、今となりてハ、自身の名を損ふなどの事ハ思ひて居られず、思ひて居られねば、奈何もして、思ふ人ハ逢ひさきものなりとの心なり、兄のも、

詞ハ、少し異なれど、同じ心なり、

千早振神のいがきも越えぬべし

吾を待つ妹の見まく欲しさよ

大伴家持

たりまとの野邊の顔花おもりげよ

見えつゝ妹をこすれかねつも

此の歌も、萬葉集よ見えざる歌よて、其の意の、大和の高圓の野邊よの、顔花
といふが咲くが、其の顔花のやうよ、人の面影が、目よつきて、忘れかねてあ
るよとの心なり、顔花との、美しき花の事よて、一種の花のあるよのあらず、
兄の、詞の變へされど、同じ心を詠みより、

面影をもなれぬものを妹が家の

庭のかほ花咲きいでよけり

柿本人麻呂

夏野ゆく小鹿の角のつりの間も

妹がこゝろをすれて思へや

此の歌も、萬葉集よ見えざる歌よて、其の意の、自身の、すこしの間も、人の
心中の、忘れず思ひてあるよ、人の、さむり思ふとも知らぬ顔なるの、歎し
き事よとの心なり、束の間との、少しの間といふ心よて、角よいふの、角の長
さをいふよ、一束、二束など、手よ握りて數ふる事ある故よて、鹿の、夏よな

れバ、角ツノの生ハえかゝる物モノよて、今生イマえさるをりりの角ツノハ、一束ヒトツカも無ナき程ほどなれば、
聊イハりの意いよていふなり、兄ケイのも、同じ心ココロなり、

ますらをの執トり佩ハく太刀タチのつりの間マも

妹イモがこゝろをこれとすれめや

柿本人麻呂

山科ヤマシナの木幡コバタの里サトを馬ウマもあれど

かちゆ我ワが來キし汝ナを思オモひかね

此の歌も、萬葉集マンヤクシツに見えさる歌なり、拾遺集シツイシツハ、山城ヤマシロの木幡コバタの里サトハ馬ウマもあれど
かちよりぞ來クる君キミを思オモへむを改めて載ノせて、作者カキノモトも、柿本人麻呂ヒトマロとしされ
バ、此コも、人麻呂ヒトマロとしさり、さて、歌の意いハ、馬ウマもあるよハあれど、人ヒトを待
させて苦クルシめさるを思オモふ故ゆゑハ、己ミざと、馬ウマも乗ノらずて、木幡コバタの山ヤマを、さるく、
徒歩カチより來クるぞ、此コハ、人ヒトひとりひとりを苦クルシめてもおられねバ、自身ミツカラも、我ワが身ミを苦クル
むる事コトよとの心ココロなり、されバ、兄ケイハ、まゝ、源氏物語ゲンジモノガトハ、宇治ウヂの姫君ヒメノミコの許ヨハ往
かれし人の、木幡コバタの里サトの事コトハ聞キきされど、夜ヨも更フけされバ、御馬ミウマよて往ユられさ
りといふ事コトのあるを思オモはれて、次の如ごとく詠ユみさり、

山城の木幡の里を聞きながら

かちより行りぬ人さへぞ憂き

讀人志らず

津の國のなにを思はず山城の

とそよ相見ん事をのみこそ

此の歌の、古今集に見えざる歌にて、其の意の、自身、唯、いつまでも、

人と相見ん事のみを思ひて、其の外の事、何事も思はずとの心なり、津の國の難波といひさるの、何といふ語を言そんとの料なり、まさ、山城の鳥羽といひさるも、とそといふを言そんとの料なり、とそとの、長へよ、いつまでも變らぬをいふ義の語なり、然れば、兄も、其の意にて、とそよと思ひて居る事、見んと思ふ事のひとつなりとて、次の如く詠みさり、

山城のごそよぞおもふ津の國の

なにそひ見んのひとつなりけり

讀人志らず

我を君なナにその浦ウラありしりぞ

憂ウレきめを三津ミツのあまとなりよき

此の歌も、古今集よ見えざる歌にて、其の意の、其許の、自身を、何とも思も
ずて居らるゝ故よ、自身ミツカラの、其の憂目ウキメは堪へずて、終ツヒよ、難波ナニハの三津寺ミツヂラよ往き
て、尼アノと成りさるよとの心なり、難波ナニハの、蟹アヲも居て、海藻ウミクサをも採る事なれば、
尼アノを、蟹アヲも聞えしめ、まさ、憂目ウキメのゆゑ、海藻ウミクサよも聞ゆるやうよして詠みよ

るなり、兄の、此く、女より詠みりけられざる男オトコよ代りて、次の如く詠みさり、

誰ナレを君キミみつの尼アノこそなりよけん

なにそよ人ヒトもおもそざりしを

讀人志らず

伊勢イセの蟹アヲの朝菜アサナ夕菜ユフナよかづくてふ

みるめよ人ヒトを飽アくよしもがな

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、蟹の、海に入りて、海藻を取るといふが、其の海松の名の如く、自身、思ふ人を見るめは飽きなく思ふ事なるよとの心なり、朝菜夕菜との、朝の食物、夕の食物にて、蟹の、其の食物の料は、海に入りて、海松を潜く事なり、兄も、同じ意を詠みたり、

伊勢の蟹のかづくてふなる海松房の

ふさよも人を見るよしもがな

讀人志らず

戀しくむ志ふよを思へむらさきの

ねずりのころも色よいづなゆめ

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、人の、自身を、戀しく思ひてくるとならべ、心中は思ひて居てくれよ、決して、顔色などよ出して、人は知らるゝやうなる事、爲すて居てもらひさしとの心なり、紫の根摺の衣の、色をいもんとての序の詞にて、紫といふ草の根の、摺りつけて染むる事もあれば

なり、因チナミといふ、紫ムラサキイロ色とい、蘇スハク枋ハクよて、赤アカく染めたる色をいふ、然るよ、今の世ヨといふ紫ムラサキイロ色の、山ヤマ藍マアと吳クレナ藍ナとを合せたる間イロ色よて、此コノの、近キヤウ世ムラサキ、京キヤウ紫ムラサキ、江戸エド紫ムラサキといふ色なり、眞マコトの紫ムラサキイロ色の、赤アカき色よて、今イマも、茜アカネ染シメとしてあるが、眞マコトの紫ムラサキイロ色なり、此コノの色、支シ那ナよても、明ミン代ノヨよ、取ト違ウへて、間イロ色とせしが、本邦ホノクニよての、友イウ禪ゼンなどの描カキ繪エの色より、ふと紛マキれ來キたるなり、まよとい、心ココロ中ノウチよといふ事なり、さて、兄イニの、下シタよ包フみても、終ツヒよの、色イロよ發イづべきを思オモひて、次の如カく詠イハみたり、

まよよのみ戀コひやををてんむらさきの

つひよを色イロよいづべきものを

讀人志シらず

須磨スマの蟹アマの鹽シホやきごころもをさをあらみ

まよよはよあれや君キミが來キたまさぬ

此の歌も、古今集よ見えたる歌よて、其の意の、須磨スマの蟹アマの、鹽シホを燒ヤく時キ着キる衣コロモの、荒アラき布フよて、其の布オを織オリる箒ハサの、其の目メも間マ遠ドくであるが、其の如カく思オモふ人の、まをく來キられぬの、間マの道ミチの遠トき事コトよても有アる事コトならんとの心ココロなり、

されば、兄の、其の來ぬ人を待つ心よて、次の如く詠みより、

一五〇

須磨の蟹の塩焼衣からき世よ

なれても人を待たぬ夜ぞなき

紀貫之

手もふれで月日經よける白眞弓

おきふしよるそいこそ寐られぬ

此の歌も、古今集に見えざる歌よて、其の意の、弓の、作りたる儘よて置けば、
反りの來る事もあり、種々の狂ひも來る事なれば、それを、其の儘よして、月
日を経しめざる弓の、反りて、直よ用よもならねば、其の儘よ、其處よ措く事
なるが、其の措くを、起くる意よ通ひして、枕詞のやうよて、序としていへ
るなり、其の心の、此の頃の、其の人を思ふ物おもひよ、寢床よ入りても、起
きさり臥しさりして、夜間の、寢も易くせられずてあるよとの心なり、白眞弓
の、白木の弓なり、さて、兄の、弓の除きて、唯ぞ寢られぬのみを詠みより、

臥して思ひ起きて思へむ憂き事の

かさなれむよや寝こそねられね

紀貫之

忍ぶれど戀しきときを足引の

山より月の出で、こそ來れ

此の歌も、古今集に見えざる歌まで、其の意の、忍ぶ事の出来る間の、忍びて居れど、奈何しても、忍び難くなる時の、其の人の許は往りんとて、家を出でて來るよとの心なり、山より月のの、出づる事をいもんとての序なり、兄の、

まゝ、其の心をかへて詠みより、

足引の山より月の出で來るも

ふもこの里は待てむなるべし

讀人志らず

君や來んこれや往りんのいざよひよ

眞木の板戸もさゝず寝よけり

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、今宵の、思ふ人も來べきり、
否々、此くて、夫れを待つよりも、此より往くべきり、否々、待つ方ならんな
ど、思ひ煩ひて、終は寝ねされば、板戸を鎖す事も忘れて、夜の明けよりとい
ふ心なり、されば、兄の、戸を鎖さずして睡りたるを評する心にて、次の如く
詠みさり、

一五四

ふゝ道よやすらふ夜半の櫛の戸を

さゝぬしもこそ哀れなりけれ

九河内躬恒

枯れそてん後をも知らで夏草の

かりくも人のおもほゆるかな

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、草の、冬よなれば、枯れそつ
る物なるが、其の枯れそてん冬の來る事も知らずて、夏草の滋りゆくが如く、
人の事のみ、深く思われてあるが、人も、今こそあれ、後の、草の、冬よ至り
て枯るゝが如く、忘れそつる事もあらんよ、然る後の事をも知らで、唯、目

一五五

前の思ひよのみ沈みてあるの、自身ながら、不思議なる事よとの心なり、され
ば、兄の、其の心を評するやうまで、次の如く詠みより、

枯れもてん冬やもおもふ夏草の

ふりくも人のおもほゆるころ

讀人志らず

君來すぞ寐屋へも入らじ濃むらさき

我がもとゆひよ霜をおくとも

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、此く待ちて居るよ、其の人の
來すば、自身の、寢屋へも入らじ、假令、此の待ちて居る木陰まで、霜の、髪
よかゝるとも、家よの入るまじとの心なり、髪、紫色の組緒などよて結ぶ故
よ、髪を言ふんとて、此くのいへるなり、さて、兄の、此の二人の、終に離る
まじきを思ひて、次の如く詠みより、

君來すむ一人やも寝ん玉くしげ

ふらみそつひよもなれぬものを

紀友則

蟬セミの聲コエ聞キけむかなしな夏ナツごろも

うすくや人ヒトのならんとおもへむ

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意ハ、蟬セミの聲コエを聞キけむ悲カナしくなる、夫れハ、蟬セミガ鳴ナげば、夏ナツとなりたるにて、夏ナツよなれば、人ハ、夏衣ナツゴロモとして、薄ウスき衣ココモを着る事なれば、心までも薄ウスくなりて、人ハ、自身ミツカラをも忘れんりと思ふ故なりとの心なり、兄のも、同じ心なり、唯タゞ、薄ウスくならぬやうよと、願ふ心にて

詠みより、

白妙シロタマこそ世ヨそなりぬとも夏ナツごろも

うすきよ人ヒトそならそざらなん

讀人志らず

飽アりでこそ思オモそん中ナカそはなれなめ

そをどにのちのこすれがふみよ

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、互ツガヒは思ひあひて居る二人の中
の、飽アきも飽アりれもせぬ程は、別ワカるゝ事が好ヨららん、然る時の、互ツガヒは戀コひ慕シタふ
心を、後ノチの忘ワスれ記念カキとする事なるよての無ナきりとの心なり、兄の、其の別路ワカレテ
よ、飽アりてといへるを、切セツなる事思へば、次の如く詠みより、

一六〇

妹イモと背セの思オモえん中ナカの別路ワカレテよ

ありて別ワカるこいふがこりなさ

河原左大臣

陸奥ミチノクの信夫シノブもぢずりたれゆゑよ

みどれそめよし我ワレならなくよ

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、陸奥ミチノクの信夫シノブの里サトより出す、振モテ
摺スリといふ布の、月草ツキクサなどをもて摺スりつけて、形付カタツキとするが、其の模様モヤウの、摺スり
亂ミされてあり、自身ミツカラの心も、其の振摺モテスリの如く、人を思ひよ亂れてあるが、此の
亂ミれ、誰故タレユエの亂ミれぞ、誰タが爲タメの亂ミれよあらず、其の人の爲タメの亂ミれなりとの

一六一

心なり、されば、兄の、其の亂れの憂きの、誰も語られず、亂れそめたる其
の人よ語るより外よの、爲ん方なしとて、次の如く詠みたり、

たれよりそ憂きを語らん陸奥の

信夫もちずりよしみどるごも

此の本歌の作者、河原左大臣の、嵯峨天皇、第八の皇子よて、源融公なり、
此の人、河原院といふ別業を營みて、其處に居られされば、河原左大臣とも稱
せられり、紀貫之の、君まさで煙たえよし鹽がまのと詠まれし、此の別業
よての事なり、

紀友則

東路のさやの中山なりくま

何しり人を思ひそめけん

此の歌も、古今集よ見えたる歌よて、其の意の、逢ふ事も出来ぬ人を、なまじ
ひよ、自身、何故よ思ひそめしならん、自身ながら、自身の心が知られずよ
あるよとの心なり、佐夜サヤの中山ナカヤマの、遠近トホトナリよある地名なり、なりくまとの、却て、
まさ、なまじひよなどいふ心なり、兄の、少し、心をかへり、

思へごもいひもいでねむ東路の

一六四

佐夜の中山いつり越ゆべき

讀人志らず

久しくもなりよける哉すみの江の

まつはくるしき物よぞありける

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の心は、住の吉の松といふも、久しき

代より聞えたる物なるが、自身の、人を待つといふも、亦、住の吉の松の如く、久しくなりたるよ、何時まで待たせて置く事よやとの心なり、さて、兄の、其の待たる、人よ代りて、次の如く詠みたり、

待たるらん此の身も苦し住の吉の

まつはさこそ思ふものりら

讀人志らず

我が袖よまぶさき時雨の降りぬるを

一六四

君がこゝろも秋や來ぬらん

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意は、自身の袖よ、時ならず、早く、時雨の降るといふは、思ふ人の心よ、秋の來ざる故ならんとの心なり、秋よ、飽くといふ心をも兼ねてしめたり、されば、兄の、返歌の心にて、次の如く詠みたり、

おもひよも濡れざる袖もかこくてふ

焦れで人の秋をいふらん

壬生忠岑

時しもあれ秋やも人のこりるべき

あるを見るごとに戀しきものを

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意は、別るよ、時もあるよ、此の秋の物淋しき時は、別るといふ事が出来るものり、思ふ人の、此は居てよ、戀しく思ひて、堪へられぬ程なる時なるを、さては、憂き事を聞くもの哉との心なり、兄のも、同じ心なり、

秋萩アキハギの下葉色シタバいろづく此コのゆふべ

飽アりでこ人ヒトを別ワカるらんやぞ

九河内躬恒

ひとりして物モノをおもへむ秋アキの田タの

稻葉イナバのそよといふ人ヒトのなき

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意は、一人ヒトリして、物モノを思へば、誰タレと

て察サツしてくるゝ人も無ければ、秋の田の稻葉イナバは戦ソコぐ風の音の、そよともいひて慰ナグサむる人も無きよとの心なり、されば、兄ケイの、其の一人居ヒトリる心ココロを、少スコし、詞ウタをかへて、次の如く詠みより、

一人ヒトリして物モノを思オモへむ夜ヨもすがら

たゞ枕マクラをぞうちかこちける

讀人志らず

いでそれを人ヒトなとがめそ大船オホフネの

ゆふのたゆふは物おもふころぞ

此の歌も、古今集は見えざる歌にて、歌の意の、みな人さちの、自身のさまを見咎めてくるな、自身の、今、物おもひよて、大船の、波は揺られてあるが如く、ゆらりくとなりて居る事よ、此の人を思ふといふ事の、佗しき事よとの心なり、いでとの、物を呼び起す辭にて、今の、サアとり、マアとりいふ辭の如し、兄の、まさ、此の物おもひといふ事より、人の、世を憂きものよする始ならんとて、次の如く詠みたり、

物をのみ思ふころや大船の

世をうみとるそじめなるらん

左京大夫道雅

逢坂も吾妻路とこそ聞きしりど

ころづくしの關もぞありける

此の歌の、後拾遺集は見えざる歌にて、其の意の、逢坂の關といふ處の、東國の路もありとこそ聞きてありしりど、思ふ人との逢坂の關の、東國よのあらで、心づくしの、筑紫よてこそあれ、夫れ故よ、自身の、實よ、其の佗しさよ、

心も消え失するやうよてあるのとの心なり、然れば、兄の、まふ、此の逢坂の
關の、自身の心より居うる關なれば、心づくしのひとつよても有るまじきぞと
て、次の如く詠みより、

誰がすうる關よしあらねむ逢坂を

こゝろづくしのひとつよそあらず

此の本歌の作者、左京大夫道雅の、帥内大臣藤原伊周の子なり、然れども、
其の傳記などの、未だ詳らりならず、

讀人志らず

秋といへぞよそよぞ聞きしあど人の

これをふるせる名よこそありけれ

此の歌の、古今集に見えたる歌よて、其の意の、自身、これ迄の、秋といへ
ば、虫の音を聞き、紅葉を見る時なりと、よそ事よこそ、聞きて居りしを、
今思へば、他事よのあらず、志の浅き人の、自身を、舊しとして、飽きよる
名よて有りしなり、侘しき事よとの心なり、兄のも、同じ心なり、

憂^ウき秋^{アキ}こなげきし言^{コト}をあと人^{ヒト}の

これをふるせる豫^{カネ}言^{ゴト}よしして

讀人志らず

うきめのみ生^ナひて流^{ナガ}る、浦^{ウラ}なれど

かりよのみこそ蟹^{アサ}を寄^ヨるらめ

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意は、吾^ワが身^ミの、海^{ウミ}よのあらねど、

海^{ウミ}の如^{ごと}く、うきめのみ生^ナひて流^{ナガ}る、浦^{ウラ}の如^{ごと}き物^{モノ}なれば、眞^{マコト}實^トの人^{ヒト}の來^キずて、一^{ヒト}時^{トキ}の慰^{ナグサ}みよ、かりよ來^キる人^{ヒト}のみなりとの心^{ココロ}なり、かりの、海^{ウミ}藻^ソの刈^カりと、一^{ヒト}時^{トキ}の假^カりとを兼^カねていへるなり、兄^{ケイ}のも、同^{ドウ}じ心^{ココロ}なれど、兄^{ケイ}の、海^{ウミ}藻^ソを採^トるよの、刈^カるのみよのあらず、潜^{カサ}きもする事^{コト}なりと、戯^{オハシ}れて詠^カみより、

刈^カりよのみなごかそ寄^ヨらん蟹^{アサ}の子^コの

人^{ヒト}をみるめのかづきもぞする

讀人志らず

うむ玉の闇のうつゝをさざりなる

夢よいくらもまさらざりけり

此の歌も、古今集に見えざる歌よて、其の意の、夢よての無く、現在の現在なりといへ、何の文理も見えぬ、闇夜の如きうつゝよての、假令、人を見ざりとも、懺りなる夢よくらべて見れば、何程の相違も無くて、夢のやうよてあるよとの心なり、うむ玉の、闇よかけていふ枕詞なり、兄も、同じ心よて、却

て、夢の方が好しとの心を詠みより、

夢よこそ人も見えけれうつゝよそ

久米路の橋をいりゝかくべき

讀人志らず

いづづらよ往きても來ぬる物ゆゑよ

見まくほしさよいざなをれつゝ